

## 仏教伝来の道を旅する

ヒマラヤ・カラコルム・パミール  
を越えて西域南道へ

やまざと 31 号の北インドとネパール中心の「仏陀の道を旅する」に続き、33 号では「仏教伝来の道を旅する」を寄稿します。伝来の道はいくつもありますが今回の旅は玄奘三蔵が建国間もない唐を 628 年に出て 644 年に帰還し仏教研鑽と膨大な経典をもたらしました。その唐への帰還ルートに当たるコースと今度の私の旅はほぼ同じです。今は自動車が行き通じるとはいえ我が国から見れば桁違いの悪路ですが、玄奘の往時はインダス川の渡河や谷沿いの崖路を荷駄部隊を率いての旅でした。素晴らしい才覚の彼は各地の政権に協力を取り付けてこの難行を切り抜けています。この事情とルートを知る為に私も出発前に玄奘の著わした「大唐西域記訳本」を予め読み、往路復路の足跡を古地図にプロットして見ましたが難しい作業でした。

私の旅は 2017 年 10 月 13 日成田を出て 27 日に戻る 15 日間でした。

10 月 14 日・イスラマバード～ペシャム

ガンダーラは BC6 世紀～AC6 世紀にわたり現在のイスラマバード・ペシャワール・アフガンのジャラバードなどカブール川北側で続いた国で交易で栄え仏教が盛況を極めたエリアで仏像製作も AC 1 世紀に始まり仏教美術と遺跡が多い。インドも中央アジアでも仏教出現以前から古く地域に受容されていたバラモン教、ゾロアスター教、ミトラ教とも仏教隆盛後も共存しており、その後のイスラムのような排他性がなくガンダーラの都市遺跡であるシルカップでも仏教以外の遺跡が混在していました。



ガンダーラ  
タキシラ都市遺跡  
仏教寺院跡  
BC3—2



ガンダーラ  
ジョウジアン仏教  
僧院跡  
AC2—3 クシャーン朝

10 月 15 日・ペシャム～チラス

チラスまで 220k を 1 列 + 2 列シートの小型バスで標高 1200m 以上でインダス川沿の川まで 400m はあるというガードレールもない曲がりくねった道を道幅全体を使って運転手は器用に車を交しながら走ります。バスは日本からの中古品で車はスズキとトヨタとバイク、スズキの軽四トラックを改造して座席とテント屋根を付けただけの 12 乗の車が住民の足でバス停もあり、そのバスの事を住民は「スズキ」と呼んでいます。

旅のコース



左：ガイドのサリーム氏、右：運転のシャー氏



自生の大麻  
の群生  
羊も山羊も  
食べている



バスを先導  
警備する警  
察車両



## 10月16日チラス〜フンザ

岩絵・ヒマラヤ西部 8000m 峰のナンガパルパット・三峽合流点などを見ながら杏の紅葉とポプラの黄葉に染まる桃源郷フンザへ向かう。



チラスの岩絵  
インダス川渡河  
を待つ間に僧や  
商人などの旅人  
が描いた



西部ヒマラヤ・  
ナンガパルパッ  
ト (h8126m)  
チラス上部の展  
望台より



三峽合流点  
右：ヒマラヤ  
奥：カラコルム  
左：ヒンドウク  
ユシュ

## 10月17日フンザを歩く

ジープでドゥイカル村カラコルム展望ピーク・さらにナガール村でデイルン峰から流れるホーパール氷河・アルチット村旧市街・フンザのバルチット城など見所と住民とのふれあいの多い1日だった。外務省 HP では此の地は立ち入り回避地区となっているが警察のガードもなく、アジア系とは違うヨーロッパ系の顔立ちの住民は親切でカメラにもポーズをとってくれるし、物乞いはイスラマバード以来、会う事はなかった。フンザは豊かではないが貧困さを感じさせない、イスラムであるがイスマール派でシーア派の一派であるが、女性も顔を見せているし礼拝の回数はない。全体的に教育熱心でウルタルⅡ峰アタックで遭難死した登山家長谷川恒男氏の遺志で開校した長谷川スクールは大学設置を考えていると翌日の訪問時の校長の弁。



ダウド  
ホテルの夕食の  
一品・うどん＋  
スパゲッティ風



ウルタルⅡ  
峰&フンザ  
の村・ホテル  
テラスより



レデイスフ  
インガー (h  
5985m)・フン  
ザピーク  
(h6277m)



スマイナル・  
ラカボシ (h  
7788m)  
ドゥイカル  
村展望ピー  
クより



デイルン峰  
から流れる  
ホーパール氷  
河  
ナガール村



フンザ・アル  
チット村の  
女性と子供達



目が青い人  
もおり、アジ  
ア系民族で  
はなく、BC  
3世紀アレ  
キサンダー  
東征との関  
連説もある

## 10月18日フンザ〜ススト

標高 2500m のフンザから標高を上げて上部フンザ地区グルミット村ワヒ族のゴジャール地区を訪問、カテドラル山群を眺める旧王族の経営するゲストハウスの庭で昼食、パキスタン最後の国境の町スストに向かった。道路は上部フンザから急に舗装も抜群で日本並みの国道に変わった。路傍の岸壁に「中国・パキスタン友好の印」と大きく

目立つ赤文字が書かれていた。経済援助、インフラ整備をネタに実質支配を目指す中国共産党の帝国主義が此处でも見えていた。

ガンダーラからフンザにかけては古代サンスクリット本「華嚴經」などが見付かっており、11世紀にチュルク系イスラムのカラハン朝の支配を受けるまでは仏教が栄え、西トルキスタン、東トルキスタン、中国への仏教伝道ルートの主要拠点であった事は考古学仏教史からも明らかになっている。



1991 年ウルタルⅡ峰で遭難死した登山家長谷川恒男氏遺志で開校・長谷川スクール・フンザ



カテドラル高峰群  
上部フンザ

10月19日ススト～中パ国境クンジュラブ峠～

中国新疆ウイグル自治区タシュクルガン

パキスタンのバスもガイドもスストでお別れ、中国が用意したオンボロのマイクロバスはヒーターもないので標高がグングン上がると寒くなるばかり、其の心算で出発前から冬装備の厚着にしていた。民家一つない道を標高をあげて2時間余り登って国境に着いた。この先は中国側に入るとタシュクルガンまでカメラもダメで監視人がバスに同乗している。国境のパキスタン側でクンジュラブ峠(h4733m)と周りのカラコルムを撮る。やっとバスがゲートをくぐると、全員が全ての荷物を持って下車、大きな倉庫のような審査場で徹底的に調べられる。荷物の一つ一つや持参した薬を分析器にかけて時間をかけて調べる。漸く荷物が終わったら、別室に一人ずつ入れて裸にして股間から脚裏まで調べる、女性にも人権侵害だが、この峠の審査場で約3時間余りかかった。中国人はスイスイ審査を通過しているので、敵国日本人を苛めてやれ、という方針のようだ。荷物を改めてバスに載せて出発するともう夕方近い。氷点下の中での荷物調べや身体検査でトイレも近くない。職員が使うトイレには鍵をかけて使わせてく

れないので、倉庫の外へ出て男女とも用を済ませた。お蔭で私は此处で風を引き2日ほど不調だった。パミールを走り、夜中に漸くタシュクルガンに着いた。またしても重いスーツケースを検査場まで荷揚げしようとするが、急勾配のスロープなので引き揚げられず、客が協力して引き揚げているが職員は手伝いもしない。そして長々と検査を始めたが、審査場の先から女性の中国人ガイドが大声でワイワイ叫び出したら検査はスピードアップした。ここには立派なトイレがあったが、用を済ませてトイレから出ようすると、建物のアルミサッシのエッジがこちらを向いており、ぶつかったら顔面に大怪我の可能性大というしろもの、中国中がこんな具合ではあるが、この国にはサービス精神と人間工学的配慮が全く欠けていると言わざるを得ない。この2点は2012年7月にアパチベット自治州の大娘姑山(h5025m)に登った時と変わらないままであり、世界の工業国を目指す中国トップの2025作戦方針も見通しは難しかり。



クンジュラブ峠(h4733m)パキスタン側から撮影・玄奘三蔵もこのカラコルムを越え帰還



クンジュラブ峠  
中パ国境ゲート  
中国側を撮影



パミール高原  
タジク人のパオ  
車窓撮影



# 10月20日タシュクルガン〜カシュガル

タシュクルガン市街地は標高 3100mで見える山脈も崑崙山脈に変わります。街外れの石頭城は 1400 年の歴史があるとされ、タジク人の都であり、玄奘三蔵も立ち寄った事が彼の著書大唐西域記にも記されている。この中国西端の街を北東に進むと、タジキスタン国境に幻想的な水色と佇まいの崑崙山脈を背にするカラクリ湖とブルンクル湖に出ます。崑崙でも高峰のコングール峰（h 7719m）とムスタングアタ（H7546m）が湖面に美しい。



早朝の石頭城

タシュクルガン郊外



上:カラクリ湖(h3600m) & コングール峰(h7719m)  
下:ブルンクル湖

カシュガルは西域南北道の接続点でシルクロードの要衝、玄奘はソロク国と言われたこの地は仏教が盛んだった事を伝えている。現在も人口 120 万人のウイグル族主体の街。



カシュガル市街果物店(スイカ、メロン、ざくろ)  
ウイグル自治区は果物が豊富



ウイグル族の子供達

カシュガル市街

# 10月21日カシュガル〜ホータン

今日は 520k のバス移動、ウイグル自治区に来たら移動距離が長くなったが道は平坦、しかし、道路の各所で公安の検問が多くその度にパスポート提出などで待たされる。ところによっては公安車が先導するので台数が纏まるまで待つという全く迷惑だが、外人に見せたく無い所に行かせないようにしているらしい。パキスタンでは警察が観光客をガードしてくれたが、ウイグルでは真逆で公安が予約した観光施設に行かせずコース変更させたり、検問で時間ロスさせる、バスが GPS で監視されており砂漠の一本道でも制限時速を守るので時間の遅れは回復出来ず、ホテルでの夕食が途中のドライブインで済ませた事も多かった。公安や役人ばかりが威張り外人観光客に迷惑をかけているが、昔のチベット自治州ならこの場合はガイドが袖の下で解決していたが、今はそれも難しく公安に振り回される事態がウイグルでは続いた。。

食事はパキスタンの鶏肉とカレーから様変わりして羊肉が増え、シシカバブ・ラグメン・ポロが多かったので私には向いていた。



ラグメン

羊肉入り  
スパゲッ  
テイの感



シシカバ  
ブ

羊肉の焼  
き鳥の感



ポロ

羊肉入り  
のピラフ  
の感



ざくろ売  
りの露店  
日本の2倍  
以上のサ  
イズ甘い

10月22日ホータン滞在

チャリクリクからジープでミーラン遺跡へ向かう24日の予定が公安当局から立入禁止指示が出た事が分かったので21日に続き22日もホータンに宿泊、22日はホータン近郊を廻る事に。こんな事がウイグルでは多すぎる。

ホータンではサンスクリット本の華嚴経が見付かっており、玄奘の大唐西域記によれば、ホータンでは仏教寺院100ヶ寺、僧侶5000人とあり、11世紀初めにイスラムチュルク系のカラハン朝が侵攻するまでは仏教が隆盛であり、多くの訳経者が出ている。

ラクダ仏教遺跡はイギリスのスタインにより発掘されて(1900~1901)ガンダーラ様式の仏像や漢代の銅銭が出てその多くは大英博物館に所蔵され、1903年には本願寺派の大谷光瑞氏が率いる大谷探検隊も訪れて学術調査をしています。

崑崙山脈から流れ出るホータン川は玉石の産出で有名だが、今では採掘は上流の岩稜地帯で行われている。川に出て私も探して見たがさっぱり分らなかった。ホータン川はタクラマカン砂漠を横断してタリム川に合流して砂漠に消える。

さまよえるロプノール湖の源流です。



マリクアワト  
古城跡  
ホータン川沿  
のゴビタン砂  
漠



ラクット仏教遺跡      ホータン



ウイグル族のブドウ農家・祖父母と孫      ホータン



ラクダ  
  
ラクット遺  
跡付近

10月23日ホータン〜ニヤ

今日は300kのバス移動、ニヤへの途中、世界で一番小さい仏教寺院遺跡となるダムクの展示室に寄ったが内部は撮影禁止、寺は南北2.25m東西2.0mという小型遺跡、付近に似た寺がもっとあったらしい。(タクラマカン砂漠について)

タクラマカン砂漠の周辺部で土・砂・砂利が混じったエリアが砂漠に向かって数十kmの幅で続き「ゴビタン砂漠」と呼ばれる。崑崙山脈からダムと水路で用水を引き農業生産も盛んで将来は大規模農業地帯になると思われる。ここには砂漠に向いた植物が繁茂しておりその代表格が此処ではタマリスク、ベニヤナギ、ラクダソウ、葦草である。ゴビタンから先の砂漠中心部は風で砂漠の地形が変わるような砂の砂漠で「流動砂漠」と呼ばれる。タクラマカン砂漠ではこの流動砂漠の地下20m~30mでは水が、その下の層は原油やガスの宝庫でタクラマカン横断する2本の公路を設けて資源開発を進めており、既に中国では大慶油田に次ぐ規模で、新疆ウイグル自治区の砂漠は中国の隠された資源宝庫と言える。



ダムク小寺院  
遺跡  
発掘現場を囲  
む展示館  
AC7世紀頃





タマリスク

ギョリョウ  
科

ダムク付近



ベニヤナギ

タマリスク  
に寄生

ダムク付近



ラクダ草とアシ草 ダムク付近

ニヤ遺跡は今のミンフン市街から 120k 北上したところに南北 25k 東西 10k の広大な遺跡で今も調査が続られているが今回は出掛ける事が出来なかった。この調査に私の中央仏教学院時代の蓮池先生が参加されており話を聞く機会があらう。此处でも最大の発掘成果を上げたのはイギリスのスタインであった。

#### 10 月 24 日ニヤ〜チェルチェン

昨日ホータンからニヤに向かう道中から少しずつ現れていたが、今が見頃の胡楊が目立ってきた。(胡楊・こよう・ことかけやなぎ について)

「生まれて千年死せず、死して千年倒れず、倒れて千年朽ちず」と形容されており、現在は伐採禁止のヤナギ科やまならし属の樹木。樹高最大 15m、幹周り最大 2.5m、陽光を好み、中央アジアの砂漠地帯の王様の存在。黄葉すると日本の銀杏よりも濃いオレンジに近い色合いになる。葉の形状は銀杏に近い物や細い柳葉の形状もあり、一本の樹でも数種の形状の葉が混在する。

日本の針葉樹林のように密植状態になる事はなく、ゴビタン砂漠にぼつぼつ間隔をあけて立つ。



胡楊の黄葉 西域南道・チェルチェン付近

チェルチェンには 16 時頃到着、こんな早い時間に着くのは稀だ。前漢時代は且末国と呼ばれ、西域 36 国の一つでしたが、618 年には随に滅ぼされ 7〜8 世紀は強大な吐蕃 (チベット) に支配されており、玄奘三蔵の帰路コースだった。

(ミイラについて) ウイグルでは各地の博物館でミイラの展示があり、今日のサボンルク古墳群は実際の古墳の周りに壁を作り、屋根を掛けて展示用にしたものだ。乾燥地帯のウイグルでは死者を着飾らせてそのまま、深さ 3.4m 長さ 5.0m 幅 2.7m の穴を掘りそこに歴代の家族の遺体が並べられたもので、気候の関係でそのままでミイラに仕上がってしまう。

#### 10 月 25 日〜26 日チェルチェン〜コルラ〜ウルムチ

中国公安によるチャリクリク・ミーラン遺跡立入禁止の為、西域南道の旅は 24 日で終わり。25 日は南道から砂漠公路で西域北道のコルラへ向かい、26 日はコルラから北京へ、27 日は北京から成田へと帰還した。砂漠公路は流動砂漠の中に道を作り、砂嵐で道が埋没しないように道の左右にそれぞれ幅 100m の砂漠植物による緑化を行い公道を維持している。途中に塔中油田など大型油田があり西域北道の街は精製石油化学の街に変貌している。別の機会にウルムチ〜西安の仏教伝来の道を寄稿したい。終わり